賀川豊彦の「乳と蜜の流るゝ郷」（その5）

1934（昭和9）年『家の光』7月号
従業員の会話から消費組合の実態が明らかになる
1934（昭和9）年『家の光』8月号
東助、高円寺消費組合の再建に向け、奮闘する

監修　**堀越芳昭**
山梨学院大学　元教授

東助は、高円寺消費組合で働きだした。東助は奮闘するものの組合の運営に大きな課題があることが明らかになる。

ある日の午前2時、組合に高等刑事が躍り込んできて、そこにいた従業員7人全員を捕縄する。左翼ではない、という理由で東助だけ縄を解かれる。6人が検束され一人残された東助は、彼らが無産階級の解放のために、命がけでやっている態度に感動し、産業組合運動でもこのエネルギーが必要だと痛感する。その上で、消費組合を再建させて、福島県の山奥に帰ることを決意する。

東助は、店舗をきれいにするところから出発し、婦人の力を借りて組合の再建に向けて奮闘する。

高円寺消費組合の店舗・経営概況

童話作家の浦江秀子の「組合に加入していた人までがやめてしまったくらいなんですよ」という発言から、この消費組合は経営に関し大きな課題を抱えていることが推測されるが、次のような従業員の発言から店舗ならびに経営概況が明らかになってくる。

そこへまた配給人の乾彦吉が、西洋手ぬぐいと、せっけん箱を持って上がってきた。（略）

「おい、なにをやかましく言っとるんじゃい。そんな実際問題ととび離れた話をする時間があるなら、もう少し、うちの店のことを心配しようじゃないか……どうも、よそから帰ってくると、うちの店はきたないなあ。これじゃあ売れんはずだよ。谷川君は人はいいけれども、哲学書ばかり読んでいるか

ら、だめだなあ、江口君がいたときには、一日に店売りだけでも五十円もあったのに、今は十円も売れないというが、少し心配になるな。」(略)

書記の平河は、小さい陶器の火鉢の中に、吸い殻をたたき込んで言った。

「**実際、この調子じゃあ、うちの組合もつぶれるぞ。もうことしの正月から、千四、五百円の欠損になっているよ。江口がいたときには、店売りだけで、一か月千五、六百円あったものだが、哲学者**(店番なのにマルクスの『資本論』を読みふけっている従業員、筆者)**が店先にすわるようになってから、三百円は売れないね。まったく驚いてしまうよ。**」(略)

西沢は言った。

「**店売りが減ってくれば、どうしても配給が多くなるからね。配給費にくってしまうんだよ。それに配給人と組合員とが、親しくなると、どうしても現金売りが断行できないからね。すぐ代金をもらえるところを三日待ち、三日待つところを十日に延ばし、とうとう一か月のものを二か月に延ばしているうちに貸し倒れになってしまうのでね。**」

きたない店舗、店売り担当者の不真面目な組合員対応、現金取引を遵守していなかったことなどがわかる。消費組合運営の核心部分が破綻していたわけで、これでは経営は成立しない。

組合に高等刑事が躍り込んでくる～東助、組合を再興して、福島に帰ることを決意～

こうした高円寺消費組合に、ある日の午前2時ごろ、突然、表にピストルの音が響いた。それを合図に、警視庁の高等刑事が消費組合の裏表から屋内に躍り込んできた。そこに寝ていた7人の者を捕縄で縛り上げてしまった。『鳥打ち帽の留』(第100回　3頁「高円寺消費組合で働き始める」を参照)の注意したことが

起こった。

高等刑事が首実検に回ってきた。そして田中東助の捕縄だけは、すぐ解いてくれた。

「こいつは左翼に関係がないんだ。ゆるしてやってくれ……この男は、近ごろ出てきた田舎者だから、なにも知らずに、ここの配給人になっているんだよ」と、いつも組合によく来る高等刑事の松野利三郎が、同僚の巡査部長に報告した。田中東助は、ほっと一安心した。

六名の従業員が検束されて一人残された東助は、熱い涙を流しながら決意をする。

手段においてはまちがっているとはいえ、これらの人々が生を賭して、無産階級の解放のために、命がけでやっている態度に、ある種の悲痛な時代相を見た。

「――そうだ！　村へ帰って、産業組合運動をやるばあいでも、この人たちの熱烈さがいるわけだ、今日の村の信用組合などが、まったく社会改造の根本主義から遠ざかってきたのは、村の貧乏人を救うてやろうという情熱を欠いてしまったためなんだ。おれはこういう人の群れに混じっていたために、あるいは、この後誤解されるかもしれない。しかし、おれはいいことをした。おれは、国体を尊重する点においては、彼等とおおいに違うけれども、貧民を救わんとする意気においては、彼等の精神をとろう。それでおれは、これを機会に、組合の後始末をしてから、福島県の山奥に帰っていこう」

(略)

「東北は、いつ救われるだろうか？　この雪の下で、故郷の飢えたる人々は、何をしているだろうか？」

そう思うと、一刻もゆるがせにしておれない気がした。まだ早かったけれども、彼は寝間着をコールテン服に着換えて、谷川がきたなくしていた店の整理にかかった。

東助は、組合を再建して福島県の山奥、磐梯山の麓に帰ることを決意する。ここから組合の再建に向けての東助の奮闘が始まる。

組合の再建に向けての東助の奮闘

東助は、朝食も食べず棚の缶詰を置き換えたり、ビスケットのはいったガラス瓶を入れ変えたり、店舗をきれいにした。

消費組合の配給は、すべて止まった。店には、ただ一人、東助が残された。そこに童話作家の浦江夫人が見えて、店舗のきれいさに驚く。

「まあ、しかし、ずいぶん、あなたは、きれい好きね。こんなに美しくしておけば、はいってきても気持ちがいいから、組合員には、いい印象を与えるでしょうよ。(略)」

とほめ、またその後に入ってきた天文学者の富士野老人も

「店がきれいになりましたね。こんなに店を清潔にしてくれると、買いにきても気持ちがいいですなあ。(略)」

とほめた。さらに東助に袷をくれた相川家の女中小浜里子も組合が美しくなったことに感心した。

三人の客が立ち去ると、すぐまた、数人の客が、配給人のいない組合の店舗に、買い物に出てきた。そして東助は、朝飯も食わないで、てんてこ舞いをした。師走の太陽が、まばゆく店先を照らした。組合は、妙なところから、復活する曙光が見えた。

それからしばらくして高円寺消費組合は難関を突破することになる。

みぞれの降る夜であった。浦江夫人の狭い座敷に、高円寺消費組合家庭会の幹部六人が集まった。家庭会には、消費組合にはいっている婦人が、七十九人も加入していた。みんな消費組合に相当の理解のある婦人たちばかりであった。

「消費組合に欠損が続いたというのも、貸し売りが多くなったからですわね」(略)

「だからね、浦江さん。このさい、二十円ぐらい一度に払い込んでくれる組合員を五十人ほど募集するより道がないじゃないの……そして金回りのいい人には購買券の前売りに応じてもらって、月末でなければ払えない人のために、奉仕するような精神で組合を経営するよりほか道はないじゃないでしょうか」

それには、今まで沈黙していた他の三人の役員たちもうなずいた。この動議を実行することによって、まさに潰滅にひんしていた高円寺消費組合も難

関を切り抜けた。店売りは激増し、現金買いがふえた。そして組合意識の発達から、付近の市場の値段とあまり違わなくとも、だれも不服を言うものがなくなってしまった。

もちろん、こうした復活の基礎になったものは婦人たちの力によっていたけれども、その陰には田中東助がおどっていた。

高円寺消費組合にとって高等刑事が躍り込んできたこと、従業員６人が検束されたことは大きな事件であったが、一人取り残された東助が婦人の力を借りて消費組合の難関を切り抜けたのは、「禍を転じて福と為す」行為であったというべきであろう。

東助が尽力した、まず店舗の美化、現金売り（買い）の増加、組合員の組合意識の発達、組合資本の充実、婦人の組合運営への参加などは組合運営の基本であり、その基本を徹底しようと奮闘した東助がいたからこそ、高円寺消費組合は難関を切り抜けることができたのである。

しかし、奮闘する東助を病魔が襲う。

＜参考文献＞

『家の光』（昭和9年7月号、8月号）
＊文章の引用部分は復刻版『乳と蜜の流るゝ郷』（2009年）を参考にした。